

## 英文法拾遺Ⅱ

伊 藤 清

### (4) 句, 節の同格について

ある英文法辞典によれば, 同格とは「名詞(相当語句)を文中の他の名詞(相当語句)と並べて置き, 1つが他を説明したり, 記述を補う関係をいう」とある。また同格語には「名詞(e.g. Smith, *the bookseller*), 代名詞(e.g. They *each* received a letter)のほか, 句(e.g. *the way to do it*), 節(e.g. *the fact that he went there*)もなることができる」という。例えば名詞の場合, *the bookseller* は名詞であり, Smith に対する補足説明になっており, このような用法の語は上記の定義を導き, また逆にその定義に当てはまる。しかし同格と言っても主要語と完全に同じ資格を有するものではない。それは同じ資格的性質を有しながらも主要語に並置されたその説明語である。従って同格という言葉とその内容あるいは機能との間にはずれがある。同格であることを証明する手段として Smith に *the bookseller* を代入するような方法が時に試みられているが, 代入して同形の文が成立する, しないは同格の証明にはならない。I, *your master*, command you では同形の文は成立しない。ある文法書では「同格語がならんで主語をなしている場合は, 動詞は最初の語に一致する」としてこの例を挙げているが, *your master* は次に述べるような理由で「主語をなしている」のではない。主語でないものを主語と考える為に「動詞は最初の語に一致する」などと説明にはならない, 事実の単なる記述になってしまう。

Apposition について先ず考えるべきことは並置という事実である。この語の動詞 *appose* は「1つのものを他のそばに置く, 2つのものを並べる」ことを意味す

る。Apposition として使用されている限り、切り離して別々に扱うことは apposition 成立の前提条件を無視するものであり、並置の意味を消滅させる。切り離しは理論の出発点で既に誤りを犯していると言える。次に *Smith, the bookseller*, ~の文に於て述べようとしていることは *Smith* に就いてであって、*the bookseller* に就いてではない。後者は、前者のみで使用した時の意味の不明や説明の不足を懸念する為、あるいは前者についての一層の理解を得んが為に付け加えられた、いわゆる形容詞としての感じの比較的弱い補足説明語である。A dream girl の dream の如く *the bookseller Smith* とは言えないまでも名詞に後置されて専らその語についての説明をなすものであり、それに主語の働きをさせることは理に叶わない。それがたまたま錯覚を起させ易い名詞形であるために、この場合は文として成立するだけであって、成立しても主語の異なる2文は伝達内容を異にする。代入には意味がない。I, *your master*, に於ても I が主であり、*your master* は *who am your master* (形容詞節; *your master* は *who* の補足説明) の如き気持で I に対して補足的役割をなすものであり、専ら I と関係するのみであり、I から独立し得ず、動詞 *command* とは無関係である。*commands* となり得ないのを見ても I に対して何等対等の関係に立つものでないことが分る。Mr A., *mayor of Kobe*, attended the meeting の場合でも事情は同じであり、*mayor of Kobe* が文の主語となり得る為には定冠詞を必要とする。定冠詞を付けないのは形容詞的働きになっている証拠、即ち独立性を失って形容詞の道を辿っている証拠であり、Mr A., used to be *mayor of Kobe*, の如く補語として使用される場合でも主語についての説明的要素ゆえ冠詞を必要としない。文法辞典に「同格語(句)は文中に於て、主要語(句)と文法上、同一関係に立つものであるから、性・数・格は互に一致すべきであるが、述詞的な要因があるので必ずしも理屈通りにいかないことがある」と説くが、同格語(句)は上述の如く、またその文法辞典にも述べる如く、ある主要語句についての補足説明の働きをなすものであるから主要語に対し、従って上述した如く動詞などの他の語に対しても主要語と「同一の関係に立つ」ものではない。いわば主に対する従の関係にすぎない故に性・数・格の一

致は原則であっても「理屈通りにいかない」ことが生じても当然であろう。

句。 同格語を名詞（相当語句）と定義する限り、句は名詞句、節は名詞節という考えであろう。事実節としないで最初から名詞節と限定してある文法辞典もある。但し同書は句については何故か単に句と記すのみで名詞句と呼んでいない。また別の辞典では「このように同格語句として用いられるのは名詞、代名詞、名詞句（不定詞句）、名詞節である」と明記している。

I am not in a position *to tell* you.

I don't know the way *to do* it.

これらは文法書の不定詞の項で形容詞的用法の例として挙げられ「同格と認められるもの」と註を付けられたものである。1つあるいはそれ以上の品詞を最初から有する語とは異なり、句や節の品詞は用いられた時の働きによってきまる。形容詞という限り用いられた時に名詞ではなく、形容詞として機能しているからそう呼ばれるのであろう。同格語を名詞（相当語句）で修飾の働きをするものと定義する以上、それは用いられた時点で名詞句である筈であり、当然不定詞の名詞的用法として分類し「同格と認められるもの」と註を付けてしかるべきものである。それを形容詞と分類して「同格と認められるもの」と註をするのは逆である。まさか形容詞として機能はしているが実際は名詞であるなどとわけのわからないことは言えないであろう。これらは Jespersen, その他の文法家のように形容詞（その他）を同格的と認めた上で同格と言っているのでもなさそうである。それならば多くの形容詞用法の中でこれらの用法にのみ「同格」などと註を付ける筈はない。

同格についての説明では同格語（句）を名詞（相当語句）で形容詞の働きをするものと言い、不定詞の用法の所では形容詞に分類したものの一部を同格と言う。同一の本の中にありながら説明の箇所が離れてしまえば矛盾した説明となっている。上述の最初から同格語を名詞、代名詞、名詞句、名詞節と明記した辞典でも挙げられた同格の名詞句の例は「修飾語としての *to*-Infinitive」の項の「名詞の付加詞」の箇所の例や上の2例と殆んど同一の形容詞用法のものであり、不定詞

の項の名詞的用法の例には 同格の名詞句として挙げられた類の用例が見当たらないのは不思議である。

上掲の例で言えば, position 即ち *to tell*, way 即ち *to do* であろうか。I am not in a position と言えればそれで事情が明らかになり, I don't know the way と言えれば内容の了解が得られるのだろうか。これらの不定詞は position (立場), way (方法) を説明する普通の形容詞としての働きをする不定詞にすぎず, いわゆる同格でも何でも無い。単に修飾関係にあるだけであり, それに同格と註を付けるのは余計なことでもあり, 自らなした同格の定義とも撞着するものである。もしこれを同格と言うのであれば a house *to live in* も water *to drink* も同格になってしまう。「語るという立場」と訳して, だから同格であるというのであればそれは日本語の表現の問題であって英語とは無関係である。the way *to do it* には「～という」という訳語は使えそうにない。同格語は完全に同じ資格ではなくても, 等号性は比較的強く, いわゆる形容詞としての感じは比較的弱いものである。例えば John を説明して a tall boy とも tall とも言うが前者は後者よりも等号性は強く, 形容詞としての感じは弱い。Preparatory 'it' によって示される名詞句の不定詞 It is good *to see you*, I think it wrong *to tell a lie* は 'it' と等号性があり同格関係にあると言えるが, the way *to do it* には等号性はない。一般的傾向として言葉は密着すれば形容詞の感じが強くなり, 離れると言い換えの気持が強まり独立性が濃くなる。即ち形容詞の感じがうすくなり, 名詞化されて感じられる。文法書に同格の例として挙げられた文, He has but one aim in life, *to succeed* の場合には, Smith, who is *the bookseller* の如く, 内容的には which is *to succeed* と one aim を説明してはいるが, life 迄で文章としての形が整い, Smith, *the bookseller*, の場合と異なり one aim と *to succeed* との間には距離があり, この不定詞は後からの付け足しであり独立性が強く, extraposition に近く, 名詞的に感じられ形容詞的要素はうすいと言える。同格語としての傾向は上述の preparatory 'it' によって示される不定詞に次いで強い。

節。 I know the fact *that he went there*.

既に述べた通り、語と異なり句、節は使用されて初めて品詞が定まる。上文の *that* 以下を名詞節と考える理由は *the fact = that* 以下という考えによるものであろうか。しかしながら *I know that he went there* と言いうるにも拘らず *the fact* を用いるのは *I know the fact* を言いたい為であって、*the fact* あっての *that* 以下であり、後者は前者の内容的説明をなすもので形容詞的力は強く、形容詞節と考える方が一層適切であろう。上に述べた *,to succeed* とちがって、*the fact, that* ～としないのはその間に密着性があり、*that* 以下が形容詞的力の強いことを示している。*the fact* に *that* 以下が代入できるということは先にも述べたように問題にならない。*I am led to the conclusion that he went there* では代入もできない。*On the ground that, on condition that, in order that* 等すべて *that* 以下はその前の名詞に対して等号性は弱い。ある文法書に「名詞節はその見方によって、形容詞節や副詞節と互に接近した場合が起りうる」として「同格節はその前の名詞といわゆる同格をなして文全体の中で主語、補語、目的語の役割を果していると見れば、名詞節となるが、同格節も結局は名詞、代名詞の意味を補充または限定するという考え方からは、形容詞節とも見られる」と説明するが、*I, your master*、に関連して既に述べたようにその前の主たる名詞と同一の文法的関係に立つものではなく、その名詞と専ら関係するのみでそれから独立し得ない存在であり、主語、補語、目的語の役割を果しているものではなく、名詞に対しその内容を説明する形容詞節としてしか考えられない。*the fact* と *that* 以下との関係は丁度 *The river is too deep to walk across* の *to* 以下が *too* の内容を説明する副詞句であり、*He is so old that he cannot go there* の *that* 以下が *so* の内容を説明する副詞節であり、*Now that he went home, I miss him badly* の *that* 以下がどのような *Now* かを説明する為に付け加えられた副詞節であるのと同様である。同じように *I am surprised that I saw you here* も *I am surprised to see you here* も *that* 以下、*to* 以下は夫々 *I am surprised* という文全体の理由を表わす、もしくは *surprised* の内容を説明する副詞節、副詞句である<sup>(1)</sup>。The reason why he went there なども同格節の例として挙げられているのを見るが、

それならば前にも述べたように形容詞節ではなく名詞節と分類して同格と呼ぶべきであろう。形容詞節と分類するならば同格などと注を付けるのは同格の定義と矛盾する。why 以下は The reason を説明する単なる形容詞節であり、同格とは無関係である。Preparatory 'it' によって示される that 以下の節は不定詞の場合と同じく、同格的と言い得るであろう。

結局 appositive とは主要語と一組となって名詞、代名詞を問わずその補足説明をなすものであるが、the way to do it, the fact that he went there の類は純粹の形容詞句、形容詞節であり、主要語と同格関係にはなく、名詞句、名詞節とは言いがたい。説明の便宜上同格という言葉は屢々用いられるが、それは名詞、代名詞その他少数の句、節などに当てはまるだけでその語の適用範囲は比較的狭いものと考えられる。

### 註

- (1) 次の諸例はある文法書に名詞節の用法として挙げられたものである。

I am glad (*that*) you have come. cf. I am glad of it.

I am convinced *that* he is honest.

I am afraid (*that*) he will fail. cf. I am afraid of it.

I am ignorant *where* their parents are.

そして不定詞の副詞用法では

I am glad *to see* you.

I am not ashamed *to shed* tears of delight.

A man would be blind *not to see* that.

You are wrong *to think* that he is guilty.

先ず (*that*) you have come は何故名詞節なのか。時々耳にするように、もし「～をよるこぶ」という風に日本語訳によって名詞節とするならば論外であるが、worth a hundred pounds に於て名詞句 a hundred pounds が形容詞 worth を補足説明している名詞句であるように、(*that*) 以下が glad を説明しているから名詞節なのか、それとも cf. として挙げた例文の of it の it に相当するから名詞節なのか。では glad の次の (*that*) 以下に相当する of it はどうなるのか。そもそも cf. は何を compare せよというのか。この場合の cf. はただ思い付きで付け加えられたとしか考えられない。次に I am glad の次に節が来れば名詞節、不定詞が来れば副詞句とはどういう理由に基

くものであろうか。また of it は何句となるのか。これらの1つの節も2つの句もすべて I am glad という文全体の理由を表す、もしくは形容詞 glad の内容を説明する、副詞節、副詞句と考えられる。I am glad (that) you have come の (that) は I am glad because you have come (副詞節) の because 程強く理由を説明しようとしたものではなく、理由の軽い述べ方であり、前後の文を簡単に結び付けたものにすぎない。

人間の使用する言葉である以上、どこまでも統一の取れた説明が無理なものであり、孰れに分類すべきかを決定することが困難な場合も時には生じる。しかし可能な限り矛盾撞着のない説明はすべきであろう。

## (5) 訳について

Miserable and disconsolate, he wandered about among *the many tents*, only to find that one place was as cold as another.—Jack London: *The Call of the Wild*  
(みじめなわびしい気持で彼は多くのテントの間をさまよひ歩いたが、どこへ行っても同じように寒いということが分っただけであった。)

これは樞引きの犬として誘拐されて来た飼犬であった Buck が極北の雪原のキャンプ場で最初の夜ねようとして、人間のテントの中に入って行っては追い出され、追い出されする時の姿である。many tents と違って *the many tents* には孤影悄然たる犬の姿がある。外国語というものは一通りの文法の知識もなくしてただ漠然とした感のみで読めるものではない。しかしながら文法を後生大事に抱え込んでいてもまた役に立たない。文法書には be の補語として不定詞が予定、意向、義務、運命、当然、可能などを表すと細分してある。まさに split hairs である。be to は「～の方向にある、向っている」の意であり、I am to meet him at six は「meet(名詞)に向っている、toward meeting」を意味する。予定、意向云々はすべて be to の持つ意味の幅にすぎない。従って更に細分できるのである。細分も良いことであろうし、また時には必要であろう。しかし細分化は必ずしも精緻を意味するものではなく、場合によっては混乱、繁雑を生ぜしめるだけである。細分化しても再び元に戻って、語句の根本の意味を把握するのではなければ、細分化の意味はない。文法に拘泥し本を読みながら文中の be to を予定か意向か

などと考へては鑑賞どころではなくなるであらう。同じ表現であれば根本には共通する意味を有し、表現が違えば意味も違う。このことを理解すれば伝えようとする意味の陰翳は理解しうる。文法は項目、規則の羅列で事がたりるものではない。文たるの根本義を示すものでなければ文法とは言えない。

英語の授業に訳の時間がある。しかしその目的は内容の理解にあるべきであつて、訳そのものにあるべきではない。それを何故かひたすら日本語に訳し、日本語での表現に夢中になる。訳に熱中している感がある。明治時代に芽生えた欧米の先進国に追いつこうとした熱意の惰性であらうか。しかしいくら努力をしても完全な訳などというものは不可能である。訳された日本語の単語によって、英語の数多くある同義語の中から原文の特定の単語が想起されるであらうか。「ぶらつく、ぶらぶら歩く」と訳してあれば元の単語は *amble, loiter, lounge, mooch, ramble, saunter, stroll, wander* の中の孰れか、あるいは更に別の単語なのか。それが分る訳でなければ完全に訳したものとは言えない。「はやい」は *fast, rapid, speedy, swift* の中のどれか。*accurate, correct, exact, precise, right* を、*dread, fear, fright, horror, scare, terror* を夫々どう区別して訳することができるのか。また訳したつもりでも読む方には分らないであらう。人には学問に関しても分野・深淺があり、生活経験もまた違うからである。

文法で感嘆詞として説明される *why* はどういう意味をもつて使用されているのか。「理屈を言わずに覚えろ。辞書の訳を当てはめろ」では習う方は何となく納得できないであらう。

“You heard the news, of course!”

“What news?”

“Why, Mae and Bill Whiteside are going to get married next Saturday.”—John Steinbeck: *The Pastures of Heaven*

「あなたニュースを聞いたでしょう、勿論！」

「何のニュース？」

「まあ、メイとビル・ホワイトサイドとが今度の土曜日に結婚するのよ。」

村に生れた赤ん坊が美しい女の子となり、そのあまりの美しさに村人達は驚き考



え込み、また思い直してつぶやく。

“Why! It is only a lovely little girl.” —*ibid.*

(なあんだ、ほんの可愛い女の子というだけじゃないの。)

“Oh,” he said. “I s’pose I can’t take none to her, then.”

“Why yes you can,” Elisa cried.—Steinbeck: *The Chrysanthemums*

「おゝ」彼は言った。「じゃ彼女のところへは菊は持って行って上げられないね」

「勿論持って行って上げられますよ」イライザは叫んだ。

Stella: I’m busy all day long and the days just fly past. I don’t know what it is to be bored. *Why*, I haven’t time for half the things I want to do.—Somerset Maugham: *The Sacred Flame*

(私は一日中忙がしくて毎日毎日が飛んで行くみたいです。退屈するってどんなことが分かりません。だってしたい事の半分する時間もないんですもの。)

これらの *why* は順番に大体次のような気持で発せられたものであり、最後のものは自問自答の形である。内容の理解を表面的な訳によって得ることは困難である。

*Why* (do you ask such a question?)

*Why* (is it?)

*Why* (do you say such a thing?)

(The reason) *why* (is that I haven’t...)

同じく感嘆詞 *My eye(s)* は自分の目を疑うさまを、*My word* は驚いて声が出ない気持を表し、時には *My* のみで使用される。

Emily: You’re welcome. *My*, isn’t the moonlight terrible?—Thornton Wilder: *Our Town*

(どういたしまして。まあ、月の光が凄いわね)

これは *My eyes* の気持であろうが、場合によっては表わされていないものが *eye(s)* と *word* とともに限らないこともある。次の例は *My God* の気持であろう。

There is so much suffering in the world it actually makes one sick to think about it, and most of us are so helpless to relieve it.... But a physician! Oh, *my!*—Tennessee Williams: *Summer and Smoke*

(この世の中には本当にたくさんの苦しみがあるので実際考えただけでぞっとしますわ。私達は大概は苦しみを除くのに余りにも無力で.... しかしお医者様は！まあ、ほんとうに。)

2, 3の感嘆詞でさえ辞書の訳語でそれらの意味が理解されるかどうか疑わしいし、訳を見て元の感嘆詞を察することはむづかしい。まして句となり節となれば訳によって原文の句、節を考え出すことは不可能に近い。それに訳は先に述べたように訳者の、また読者のもつ数多くの要因によって必ず相違し、一様になることも、また一様に受け取られることも決してない。訳は翻訳ではない。できる限り正確に日本語らしい文に訳するにこしたことはないが、訳よりも英文自体の表わす正確な意味内容を理解すべきで、訳に凝っても役には立たない。時間、労力の浪費である。英文の正確な意味を知ろうと思えば可能な限り語原を含めて1語1語の意味や類似の語(句)間の意味の差を考え、更に語句の前後関係に気を配らねばならないし、日本語と異なる語順、表現にも注意しなければならない。要は英語自体に可能な限り目を向けるべきである。日本語に訳した上で意味を考えてもそれは日本語の問題になってしまう。旨く訳しようと思えば思うほどそれは日本語自体に関する問題となり、英語から離れることになる。英語の時間に日本語を考えれば英語に向ける時間はそれだけ減り、英語の力が付くのが遅くなるのは当然であり、しかも「彼は道に沿って歩いて行った」などと訳する。日常生活でこんなことを言えば笑われる。しかも教室ではまかり通って誰も笑わない。訳を一生懸命やって日本語は香りを失って怪しげなものとなり、英語はいつ迄経っても語感が得られず進歩しないというのであれば貴重な時間を潰して何をやっているのか分らない。

辞書の訳語を繋ぎ合せて日本語を作り上げたからといってその英語が理解でき英語を読む力が付いた証明にはならない。最も大切なことはできる限り日本語を退けて英語自体をもっと観察することである。文法書を編集している者ですら英語そのものを見ていないのではないかと、自分で考えることすら止めてしまっているのではないかと思われる証拠が多くある。例えばどの文法書にも冠詞の項で、

a red and a white tulip と a red and white tulip の類を例文として載せてその差を説明している。名詞の項で複数を説明しながら、これらの複数形を説明してあるものには出会ったことがない。これらは単数形でしか使用されないと考えているが如くである。ただある文法書には次の説明がある。

「赤いチューリップと白いチューリップは可愛い花だ」という時には  
The (A) red and the (a) white tulip are very lovely (flowers)

と言い、「まだら」の方は、

The (A) red and white tulip is very lovely  
とする。なお、これらが複数形となるときは次のようになる。

*The red and the white tulips they grow are very lovely.*

*The red and white tulips they grow are very lovely.*

The (A) ～として「これらが複数形となるとき」どうしてもすべて The ～のみになるのか理解に苦しむ。不定冠詞を用いた時の複数形の説明を避ける為に複数形の方の例文2つに they grow を付け加えたとしか考えられない。不定冠詞を用いた場合、

a red and a white tulip の複数形は red and white tulips,  
a red and white tulip の複数形も red and white tulips

である。従ってその区別は実際には次のように行なわれており、少し注意して本を読めば例は多く見付けられる。

the black-and-white curtains —Paul Bowles: ‘How Many Midnights’, *The Delicate Prey and Other Stories*

the two liver-and-white ones —Jan Struther: *Mrs. Miniver*  
(2匹の茶褐色と白のまじったポインター犬)

単数の時でも hyphen を用いることがあり、また次の2例は「まだら」ではない。少女の顔が紅と白のまだらではおかしかろう。

a weak, faded, lead-and-pink-colored affair —Theodore Dreiser: *The Lost Phoebe*  
(弱り、色あせ、鉛桃色をしたしろもの：カーペット)

with pink-and-white cheeks just touched by the sun —John Galsworthy: *The*

*Apple Tree* (ほんの少し日に焼けた薄紅の白い頬の)

上例の *The Lost Phoebe* の中で Dreiser は同じ頁に次の例を用いて両者の区別をしている。

with green and white lickers (緑色や白色の苔で)

また英文を読む際に少し注意しておれば正誤問題として *My father is a poet and a scholar.*—Pearl Buck: 'Repatriated', *The First Wife and Other Stories* で2番目の不定冠詞を誤りとする類の問題など出せる筈がない。実例が余りにも多く目につきすぎる。Suburb は必ず *the suburbs* であると信じ切っているような説明もある, *the + pl.* の意味を他の箇所の説明しながら。

in a town or a suburb—Wendy Hall: *Life in England*  
Wimbledon is a suburb.—*ibid.*

to an elevated suburb—Thomas Hardy: *To Please His Wife*

in the suburb of Saint Antoine—Charles Dickens: *A Tale of Two Cities*

文法は文法と考え実際の英文から遊離した非現実的な例文や、説明に最も都合のよい例のみが罷り通り、高等英文法と銘うっても、それによっては実際の英文の文法的解釈ができない。英文自体はその内容がおとぎ話であろうと、論説文であろうと文法の教科書にもなりうるし、英作文の模範解答でもありうる。英作文の教科書には註として語句の訳を掲げてあるものが多い。いわゆる英作文の第1歩がこの語句選択の力を養うことであるのに、最初から与えられていたのではその作業は空中に樓閣を築くに等しいものとなる。重ねて言えば要は英語自体をもっと注意深く観察することであり、英語をほったらかしにして日本語に血道を上げるなどまるっきり方向が逆である。

訳について最も奇異に感じられるのは慣用句あるいは熟語に対する態度である。*in order to*, *in spite of* の意味を知る者は多く、それらの単語が相集って何故そのような意味になるかを知る者は少い。熟語に限って何故訳を殆んどしないのであろうか。文法書にも熟語が取り扱われている。用いられている前置詞を区別し、

暗記し、無条件にその熟語全体の意味を覚えさせ、また覚えようとする。数語が相集まってどうしてそのような意味になるかは一向構わない。訳が定着している意味に対し、疑問を抱かない為、何も考えない為、1種の麻痺状態に陥っている。中学生ともなれば一通りの理屈は分る。単語の意味を知るに従って熟語の origin はできる限り説明すべきであり、また知るべきである。origin を簡単に説明したところで労力も時間もかかるわけではなく、却って熟語本来の意味を明瞭に理解できるし、意味を暗記する労力は殆んど不要となる。

*few and far between* は数が少く (*few*) その間が *far* ゆえ「ごく稀に」の意味は当然であり、*three days on end* は1日の始めと終りの端 (*end*) が接触 (*on*) した3日間。合計3日でも第1・2日と第4日では2日目の終りと4日目の初めとが接触していない為「3日間ぶっ通し」とはならない。He gave me a lot of trouble, but I like him *all the same*. *all the same* は a lot of trouble を与えても与えないのと全く (*all*) 同じ (*the same*) ようにの意味であり、*just the same* でも差は *all* と *just* の間の差であるに過ぎない。丁度 *make the most of* と *make the best of* との差が *most* と *best* の差にすぎないように。

Whether we like it or not, we have to go ahead, *making the best of* what we have.—Peter Milward: *The World and the Word*

この作品は教科書に編まれ、註には「できるだけよく利用する」とある。(テキストの註には辞書に載っているものをそのまま転載していることの何と多いことか。学習者の辞書を引く労力を省いてやろうとする学問上の過保護現象であろうか。) ある辞書では *most* を使った方の句を「～をできるだけ利用する」、*best* を使った句を「～を大いに利用する」とあるがどれだけの意味の差が区別できるだろうか。「～を使って最多量のものを作る」、「～を使って最良質のものを作る」を念頭に置けば、その場に応じた理解ができる。

“‘Tis the same face, *to a hair!*” cried one man, cutting a caper for joy.—Nathaniel Hawthorne: ‘The Great Stone Face’, *Twice-Told Tales*

(「同じ顔だ、そっくりだ!」と1人の男がよろこびではねまわりながら言った。)

髪の毛1本に到るまで (*to*) からは「寸分たがわず」の意味が生じ, *to the turn of a hair* となれば「1本の髪の毛のねじれ具合(まがり方, くせ)に到るまで」を意味する。同じことは *to the minute*「例の (*the*) 分という単位まで」, *to a day, to an inch* にも言える。*sing to the piano* は高ければ高く, 低ければ低くピアノの音まで声が届くように歌えば当然ピアノに合わせて歌うことになる。

The members were a poor lot, many of them in the City—stockbrokers, solicitors, auctioneers, *what not!*—Galsworthy: *The Forsyte Saga*

(そのクラブの会員は多くはシティのつまらない人々だ。株式仲買人や、事務辯護士や競賣人なんかだ。)

普通 *and what not* となるこの句の意味をあるテキストの註では, *and so on* とし, また別の文の場合の註には *and things like that* としているが, 類似の意味をわざわざ別の英語で書き直したところで *and* と *what* と *not* が集まってどうしてそのような意味になるのかは少しも分らない。即ちこの句自体についての註をしたことにはならず, 日本語で訳を付けるのと大差はない。*and what has (or have) not been mentioned so far.*

*For all* も *with all* も「～にも拘らず」と訳してあるが, 前者は「あらゆる～と引き換えに」, 後者は「あらゆる～を相伴って」を意味する。*In fact, in reality, in truth* の差は事実, 現実, 真実 (に於て) の差となる。

*In fact* he carried nothing but the lunch wrapped in the handkerchief.—London: *To Build a Fire*

(事実彼はハンカチに包んだ辨当以外何ももっていなかった。)

*In reality* he had been unhappy, horribly so.—Dreiser: *Free*

(現実には彼は不幸であった, ひどく不幸であった。)

*In truth* so deeply was I excited by the perilous position of my companion, that I fell at full length upon the ground,...—Edgar Allan Poe: *A Descent into the Maelström*

(真実私は私の連れの危険な位置に全くはらはらして長々と地面に伏せ……)

従って *true and real* は tautology ではない。

So early was it that it was beyond him; yet it was filled with haunting reminiscences of wordforms he knew and which his trained intuition told him were *true and real*.— London: *When the World Was Young*

(その言葉は非常に昔のものであったので彼には理解できなかった。しかもそれは彼が知っておりまた彼の訓練された直感はそのが真実のものであり現実のものであることを彼に告げる語形を絶えず連想させるもので満たされていた。)

同様に *look and see* は視線を向けて見定める, *listen and hear* は耳を傾けてその音の意味内容を聞きとることである。従って動作順を示すこれらの語の順序は変わることはない。要するに *be to* に関連して述べたように語がちがえば意味がちがいがい, 語が同じであれば意味は同じであり, ちがうように見える場合でも元の意味から発展しただけのものであり, 共通する何かがある。ある辞書で=としてあるが *once a year* (1年1回) と *once in a year* (1年かけて1回) とは同じではない。地球は1年かけて太陽の周囲を1回まわっているのであって, *once a year* でまわるのではない。

要するにいわゆる訳は大意で十分であり, 後は一通りの文法知識を根底として英文を注意深く観察し, 深く考えてその内容を正確に読み取ること重点をおくべきであろう。